

# 倫敦塔

## 映画文学人生論

夏目漱石 (1867-1916)

『倫敦塔』1906 「帝国文学」

『吾輩は猫である』1906-1907 「ホトトギス」

『カーライル博物館』1906 「学燈」

『幻影の盾』1906 「ホトトギス」

英国の歴史を学んだものでジェーン・グレイの名を知らぬ者はあるまい

夏目漱石の『倫敦塔』は若い頃、読んだことがあるが、面白いとは思わなかった。というより、面白さが理解できなかった。理由は単に私の教養が不足していたからにほかならない。たとえば、こんな文章がある。

英国の歴史を読んだものでジェーン・グレイの名を知らぬ者はあるまい。又その薄命と無残の最後に同情の涙を濺がぬ者はあるまい。

そういわれても私は知らなかったが、恥ずかしいとも思わなかった。そもそもジェーン・グレイの名を知っている日本人がいるだろうか。ほとんどの日本人は日本史も知らず、しっかりした歴史認識を持ち合わせていない。そんな日本人に英国の歴史的知識を期待しても無理ではないか。

しかし、漱石も日本人である。彼は英国の歴史を読んでおり、ジェーン・グレイの名を知っていた。同じく日本人である私が英国の歴史を読み、ジェーン・グレイの名を知って損はないだろう。

巻末の注解によれば、ジェーン・グレイは英国国王ヘンリー七世の曾孫。美貌と学才に恵まれていた。権臣ノーサンランド公の野心のため、その息子ギルフォードと結婚させられ王位を継いだ

# 倫敦塔

映画文学人生論



が、在位九日間でメアリー一世に捕えられ、夫とともに処刑されたという。

プラトンの哲学をギリシア語で読むことができると、同様の才媛がお気の毒にと、同情の涙をそそぎたいが、その前に英国史をすこしかじっておかなければ話にならない。『倫敦塔』の歴史は英国の歴史を煎じ詰めたものだと言えよう。

ジェーン・グレイの他にも英国国王の名が何人か登場する。エドワード三世、リチャード二世、ヘンリー四世、ヘンリー六世、チャールズ二世。さらに、幽閉された王子が「命さえ助けて呉るなら伯父様に王の位を進ぜるものを」とつぶやくが、その伯父とはリチャード三世だ。

こんな英国国王の名はほとんどの日本人にはなじみがないが、沙翁（1564-1616）の史劇を通じてある程度は「人殺しいろいろ」の歴史がわかる。

沙翁シェイクスピアは『リチャード二世』『ヘンリー四世』『ヘンリー五世』『ヘンリー六世』『リチャード三世』『ヘンリー八世』などを後世に遺したが、ジェーン・グレイの曾祖父の『ヘンリー七世』という作品は遺していない。

しかし、『ヘンリー六世』では赤薔薇ランカスター家の系統のリッチモンド伯として白薔薇ヨーク家のリチャード三世を破り、薔薇戦争を終結させたテューダ朝初代の王となっている。

骸骨や是も美人のなれの果

漱石